

P-441 肺癌に対する術前補助化学療法実施時のランソプラゾール併用投与による副作用抑制効果の検討

長谷川 剛・大谷 真一・遠藤 俊輔・佐藤 幸夫
齋藤 紀子・手塚 憲志・山本 真一・蘇原 泰則
自治医科大学外科学講座呼吸器外科

(背景) IIIA 期肺癌に対して術前化学療法の有効性が多くの報告で示されてきたことより、I 期及び II 期肺癌に対しても術前化学療法を行なうことで外科治療成績の改善が期待される。問題点は化学療法の副作用である。嘔気、嘔吐、食欲低下に関して、逆流性食道炎が増悪因子であるとの仮説をたて、その治療が副作用発現にどういった影響を及ぼすかを検討してみた。治療薬剤としてプロトンポンプインヒビター (PPI) 製剤であるランソプラゾール (LPZ) を選択した。(対象) 当科において肺癌に対する術前補助療法実施患者で、当研究に同意の得られた 19 名を対象とした。(方法) 初期治療として LPZ30 mg1 日 1 回を 8 週間、維持療法として LPZ15 mg1 日 1 回を 4 週間投与した。治療開始前、4 週後、12 週後にアンケート調査を行い逆流性食道炎に対する自覚症状をスコア化して調査した。定期的に採血検査を施行し副作用を確認した。化学療法前にスコアが 5 点以上を A 群(逆流性食道炎の徴候を強く有する群)、5 点未満を B 群(逆流性食道炎の徴候を強く有さない群)とした。診療録より臨床経過情報を抽出し嘔気、嘔吐、食欲低下の副作用を評価した。化学療法はシスプラチンをベースにドセタキセル又はビノレルビンを併用した。(結果) 投与前及び 4 週後そして 12 週後のスコアの平均は、全体で 3.5, 2.5, 2.9 であった。A 群 (4 名) ではスコアは全例で改善を認め、嘔吐、食欲低下の副作用は 60% で著明に抑制された。B 群 (15 名) ではスコアの悪化は見られなかった。軽度の骨髄抑制はほぼ全例に見られたが重篤な副作用は無かった。(考察) 術前補助化学療法実施時のランソプラゾール投与は周期を含めて安全に施行可能であった。逆流性食道炎の徴候を強く有する患者群では、LPZ の長期投与は嘔吐、食欲低下という主要な副作用を抑制する可能性があることが示唆された。